

かわら じょう
河原城遺跡の調査



1998.11.28



(財)大阪府文化財調査研究センター

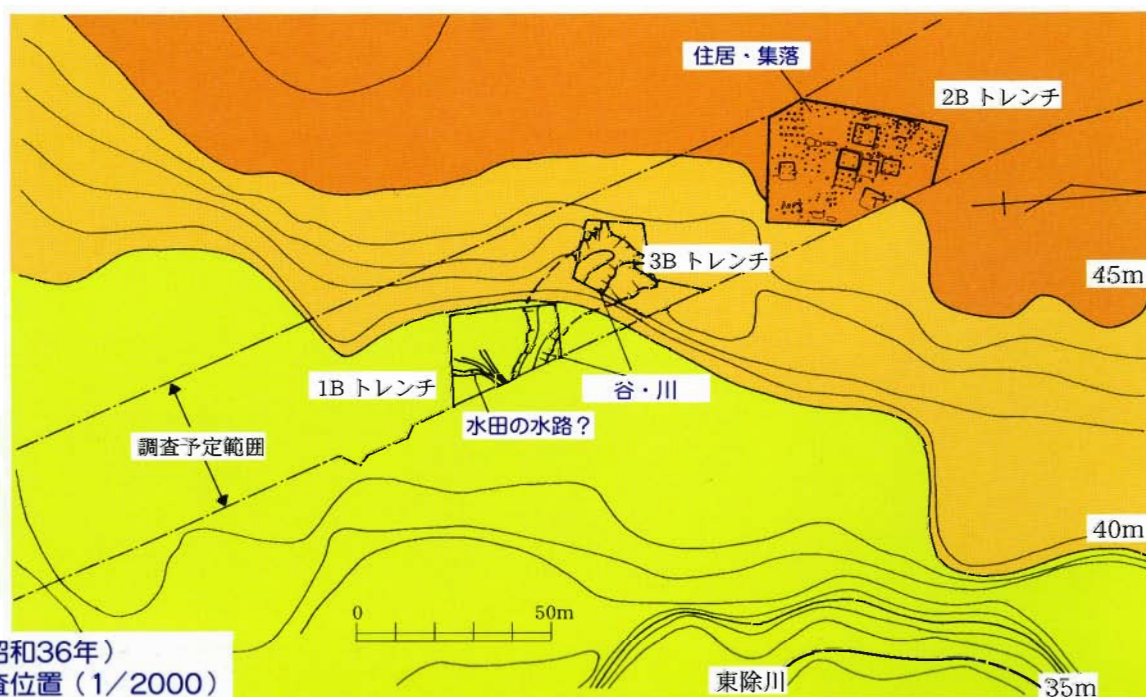
今回の発掘調査について

河原城遺跡は、東除川の中流域である羽曳野市河原城から美原町多治井にかけて広がる遺跡です。もともと、地名などから中世の鎌倉時代末期（14世紀ごろ）に作られた城跡があることは知られていました。これまでの発掘調査では、複数の地点から古墳時代後期～古代（6～7世紀ごろ）の建物跡や土器などが見つかっていましたが詳細な遺跡の実態は不明でした。

この河原城遺跡の一部が南阪奈道路の建設予定地となり、現在、工事に先立って埋蔵文化財の調査を行っています。その結果、東除川の西岸の段丘上で6世紀後半～7世紀前半（古墳時代後期～飛鳥時代）の集落がみつかりました。建物・土器の数の多さから、今回の調査区域はこの時代の河原城遺跡集落の中心部分と考えられ、東除川周辺の古墳時代・古代集落の実態を知る上で貴重な成果といえます。



2Bトレンチ遺構配置図 (1/300)



旧地形（昭和36年）
と調査位置（1/2000）

調査成果

古墳時代後期～飛鳥時代の集落 東除川西側の段丘上では、8棟の
 竪穴住居（写真1）や数多くの柱穴がみつかりました。柱穴の
 まとまりから、掘立柱建物（写真2）が11棟はあったと考え
 られます。住居や建物の使われた時期は、出土した土器から6
 世紀後半～7世紀前半（古墳時代後期～飛鳥時代）と推測でき
 ます。

これらの住居跡・建物のほとんどは、一辺が北北東-南南西
 方向に沿って建てられており、何らかの規格や区画に従って住
 居や建物が並んでいたと思われます。

集落の移り変わり 竪穴住居跡から出土した土器には、集落の
 存続期間の中でも古い時期（6世紀後半）のものしかみられま
 せん。また、すべての竪穴住居跡は掘立柱建物の柱穴に壊され
 ています。このことから、河原城遺跡では竪穴住居から掘立柱
 建物だけの集落へと変化したことが想像できます。古代社会の
 始まりである飛鳥時代の到来とともに集落の建物も変化したよ
 うです。

集落の周囲 建物群に隣接した場所には、蓋をした土器が埋め
 られていました（写真3）。これは、乳児の遺体を土器に入れ
 て葬ったものと思われ、集落に隣接して墓が作られたと考えら
 れます。

また、段丘の斜面の谷には何点かの土器が捨てられていまし
 た（写真4）。集落近くの谷を水場として利用していたのかも
 しれません。この谷は、段丘の裾の小さな川につながり、その
 周囲には水路が掘られています。これが水田に伴う水路であれば、
 段丘下の低地では水田が営まれていたとも考えられます。各調
 査区域の成果から、集落の周囲の土地利用の状態も推測できます。

誰が住んでいたのか 『日本書紀』には、7世紀後半に河内国丹比郡
 にいた氏族として「川原」「河原」氏の姓が記されています。
 今回見つかった建物群は、古代の河原氏の先祖となる人々が生
 活した集落かもしれません。



▲写真1 竪穴住居 260



▲写真2 掘立柱建物（建物a）



▲写真3 土器を用いた墓（土器棺384）



▲写真5 遺跡から出土した土器



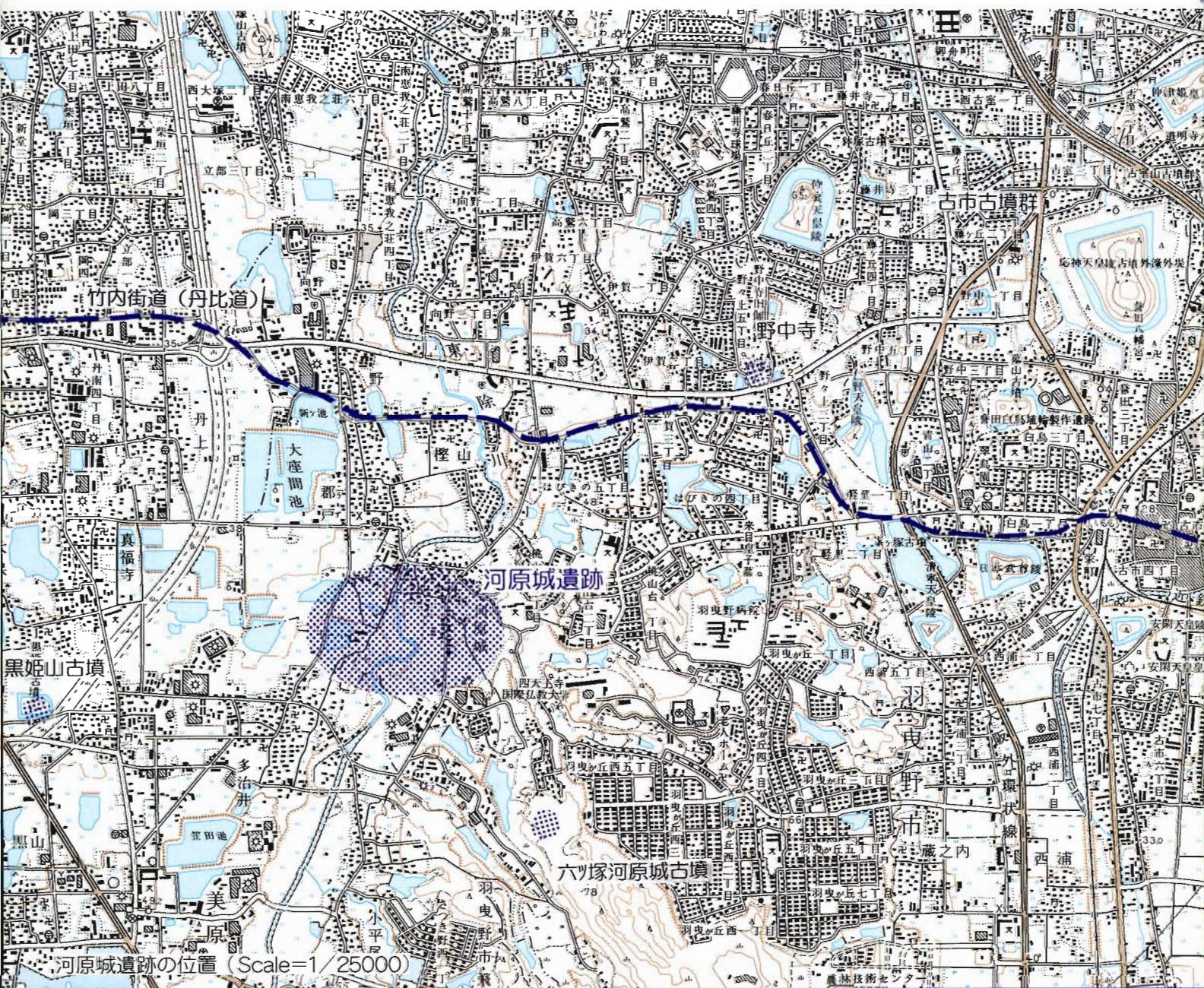
▲写真4 谷に捨てられた土器

周囲の遺跡

遺跡の南東約1kmの東除川東岸では、六ツ塚河原城古墳という7世紀はじめの古墳が見つかっています。河原城遺跡は、この古墳と同時代の最も近接した集落です。また、河原城遺跡の集落からはこの古墳を一望することができます。六ツ塚河原城古墳に葬られた人は、河原城遺跡の7世紀の集落を治める人物であったと考えられます。

まとめ

今回の調査によって、これまで不明確であった東除川流域の古墳後期～飛鳥時代の集落の様相が明らかになりつつあります。時代の変遷にともなう建物の変化や、住居とそれに隣接した墓や水田域の関係などは、古代国家のはじまるこの時代の一般的な集落の状況を知る上で貴重な成果と言えます。今後の調査によって、さらに集落全体の状態が明らかになることが期待されます。



河原城遺跡の調査 河原城遺跡現地説明会資料 1

発行 (財)大阪府文化財調査研究センター
〒536-0016 大阪市城東区蒲生2丁目11-3小森ビル4階 tel.06-934-6651

発行日 1998年11月28日
印刷 石川特殊特急製本株式会社